教主さまお作 灰釉茶盌 銘「椿寿」

【緑寿館土　緑寿館椿＋ネムノキ釉】

題字 出口直日

通巻第574号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

木の花の匂ふがごとく三五の
みのりは四方に広まりにけり

出口王仁三郎聖師

千載一遇の「立直し」の神業

大本本部長　浅田秋彦

聖師さまは「大本の生命は立替え立直しである。しかも立替え、すなわち破壊は悪魔がするのだ、大本神の仕事は建設にある」と説かれました。

昨年9月に出版された〝立直しの神諭〟「いづのめしんゆ」には「綾部の大本は今が一番大事の大峠であるから、皆の役員信者が誠の日本魂を発揮して、天地に代わる大活動の時期であるぞよ」と示されています。

教主さまは、昨年の大本開祖大祭ごあいさつで、『聖師さまは今、私たち大本信徒に「大本のみ教えを広く世界に宣べ伝えて、人々を救いなさい」との御声を発しておられるようで、今一度、腹帯を締め直して、神教宣布のご用に力を尽くさせていただかなければならないと思うのでございます』とお示しくださいました。

今年の教団方針では、宣教方法を従来の「講師と信徒の対面型」から、「み教えの実践リーダー型」へ大きく転換しました。これは本部と地方機関が向き合った状態から、共に外に広く、内に深くの宣教へ転換することであります。そのため信徒一人ひとりが「み教えの実践リーダー」となり、神教をお伝えするご神業にお仕えするのです。これにより個々の身魂磨きと同時に、周囲の信徒の育成にもつながります。具体的には、「計画（望み）・実行（為し）・評価（省み）・改善（悟る）」を順次行うことによって、成果を収めることができます。計画はご神業ですから、素直にさせていただく決意が大切です。実行には具体策・準備を本部が整え、本部・地方機関が一体となって実践することです。その結果を評価し、次につなげていきます。結果について、本部は支援・褒賞することも考えています。

この実践サイクルが動けば、「いづのめしんゆ」の通り「大本は何彼のことが忙しくなりて、目の回るごとくになる」ので、本部も地方機関も信徒も、もっともっと忙しくなり、これがまた有難いわけです。この年も相変わりまして、よろしくお願い申し上げます。

oomoto 公開講座

大本の霊界観

～目に見えないものを信じて生きる～

愛善宣教課主事　鈴木 林太郎

現界は霊界の中にある

一般に霊界というと死後の世界、目に見えない世界をイメージする人が多いかと思います。しかし、厳密にいうと霊界は死後の世界だけにとどまりません。

現界とよばれる「この世」にも目に見えないものは存在します。例えば、人の心は肉体から取り出して他人に見せることができませんが、その存在を疑う人はいないと思います。本日は人の心を「意思」や「想念」という言葉に置き換えて話を進めたいと思います。

恋人を待ち焦がれる一時間と二人で一緒に過ごす一時間では、どちらのほうが時間の経過が早く感じるでしょうか。楽しい時間はアッという間に過ぎてしまいますね。でも、どちらの時間も時計の針の進みに変わりはありません。あるいは授業中、顔は黒板に向いていても、意識は上の空？？…　のようなときもあります。「お弁当のおかずはなんだろうなぁ」とか「学校が終わったらなにして遊ぼうかなぁ」とか、想念は別のところにあります。

私たちの肉体は時間・空間に拘束された現界にありますが、想念は体の外を自由に動けます。このような人の意志や想念を現界のなかの「精神界」といいます。大本では死後の世界だけでなく、この精神界も霊界の一部としています。

霊界は想念の世界で無限に広がっています。どこかへ行きたいと思えばその場所に行け、固定的な時間や空間にしばられないのが霊界の特徴です。

人の本体は精霊

大本の霊界観をお話する上で、もう一つ重要なことは、〝万物には霊が宿されている〟ということです。犬や猫のような動物をはじめ、植物や石ころのような鉱物にさえも霊は存在します。逆説的な言い方をすれば、この世では霊が存在しなければ、形が存在しないということです。

人の心は文字どおりコロコロと心境が変わりますが、それだけ精妙にできているからです。精妙な霊という意味から、人の霊を特別に「精霊」といいます。楽しいとか悲しいという心の情態は、言葉や表情に現れてきます。このことを〝霊は形相する〟と表現しています。霊が主であって、その力が形（体）となって現れるのが万有の法則で、これを霊主体従といいます。

人は精霊と肉体で構成されていますが、重要なことは霊が主で体が従であるということ。つまり、人の本体は肉体でなく精霊であるということです。

精霊は 人の本体 肉体は
その精霊の ころも（衣）なりけり
（出口王仁三郎聖師）

そして、人の死は肉体の死であって、精霊は霊界で永遠に生き続けます。精霊は不滅なのです。

天国と地獄

「天国と地獄の長い箸」の例え話を聞かれたことがあるでしょうか。天国にも地獄にも大きな鍋が用意されていて、みんなで囲んで食事をするのですが、それぞれに長い箸が置かれています。

必ずその箸を使って食べなければならないというのが、天国・地獄に共通した決まりごとでした。

地獄の人たちは、その長い箸で、自分の口に食べ物を運ぼうとしますが、何度やっても食べ物はこぼれるばかり。食べることはできませんでした。ご馳走が目の前にあっても常に飢えに苦しみ、そのせいで争いも絶えない状態でした。

天国の人たちはというと、たくさんおいしいものを食べ、誰もが幸せに満たされた顔をしていました。なぜなら、みんな、その長い箸を人のために使っていたのです。鍋を挟んで向かい側にいる人に「はい、どうぞ」と食べ物を届けていたのです。「まずは、あなたからどうぞ」と、自然に思える人たちの集まる天国は、飢えも争いもない、みなが笑い合える幸せな世界でした。

天国は「愛の善」と「信の真」から成り立っています。天国の愛は利他的な〝世のため人のため〟という愛で、熱に相応します。同様に信は正しい真理を信じることで光に相応します。

男女のカップルを指して「アツイね」とはやし立てたり、良いアイデアが浮かんだときに「閃いた！」と言ったりするのも、愛（意志）は熱に、信（智性）に光に相応することから生まれた言葉のように思います。

死んだら誰もが「地獄」より「天国」に行きたいと思うはずです。天国は嘹喨（りゅうりょう）な音楽が流れ、美しい花に囲まれながら過ごす極楽の世界、地獄は針の山や熱湯の釜で、苦痛に満ちた世界を連想します。

しかし、全ての精霊にとって、天国は安楽であり地獄は苦しみの世界とは限らないのです。精霊によっては、天国も決して楽なところではないのです。

今から20年以上前の学生時代、私にとっては友だちと夜の新宿で遊ぶのが楽しくて、そこはまさに天国のようでした。でも、今は歌舞伎町を一人で歩くのはちょっと怖いです。新宿の街が天国か地獄か？　ということを言っているのではなくて、私の想念が当時と今では違うので、同じ街でも感じ方が違うということです。想念がそこにいる環境の見え方までも変えてしまうのです。

天国と地獄は、神の「愛善信真」というモノサシから分けられた世界です。神は決して「生前に罪を犯したから地獄に落とすぞ」とはされません。むしろ地獄の精霊まで救いあげようとされるのが神の愛で、いささかも悪い想念は持っておられないです。しかし、地獄人はこれを忌み嫌い、神より離れることのみを願うのです。

現世において、愛善信真と真反対な「利己主義（われよし）」「弱肉強食（つよいものがち）」に満たされた精霊にとっては、神の救われようとする御心がかえって苦しいといいます。この改心の苦しさが地獄の苦しみといえるかと思います。

大本教典の「霊界物語」には、天国にふさわしくない精霊にとっては、その天国の〝愛の熱〟と〝信の光〟に耐えうることができないと示されています。

天国に昇る資格のない精霊にとっては、そこに至る道の入口すら目に入らないのです。

愛善の 徳に充ちたる 魂（たま）なれば
みな天国に 籍をおくなり
ことさらに 神は地獄を 造らねど
己（おの）が造りて おのが行くなり
（出口王仁三郎聖師）

内分と外分

人の精霊には内分と外分といわれる部分があります。「内分」は精霊の内奥部に位置し、意思と智性からできています。内分の本質は、もとは神から賦与された〝愛〟と〝信〟ですが、その愛は〝意思〟として、信は〝智性〟として現れたものです。

「外分」は、精霊の外辺部にあって物質界と接触しており、精霊の感覚と動作に属するものをいいます。具体的には顔貌、言語、動作などです。人は成長するにつれ外分が形成されていきます。

人は外見を装って人と接することができます。内心「この人苦手だなぁ」と思っていても、顔は笑顔をつくろって「こんにちは」と言えます。しかし愛想笑いしたり「お母さんが寝不足だから夜泣きはやめとこう」という赤ん坊は聞いたことがありません。生まれたころは内分と外分が一致しているからです。

霊界は内分の世界で、人は死ぬと、時間がたつにつれて外分が剥（は）がれていきます。その精霊の本性といいますか、本質を隠しとおすことができません。

人生の大半を占める仕事にしても、人のために役立ちたいと〝まごころ〟から作るものと、功名や利益ばかり求めて作るものでは、結果が違ってきます。愛も自己愛に偏（かたよ）れば「愛悪」になるし、信も真理から外れては「信偽」といってニセモノになってしまいます。最も恐ろしいのは、愛悪や信偽の情態であることに気づかずに、それが当たり前になってしまうことです。

内分が神心に近い、つまり愛善信真に開けている人は、自然と徳が備わっているように感じます。そして、良い想念は良い想念を呼ぶように、徳の備わった人には、自然と志の高い人が集まってくるのも霊界の法則とよく似ています。

霊界を知って人生の目的を知る

大本では開教以来、神による「三千世界の立替え立直し」が啓示されています。三千世界とは天国・地獄・現界の三界をいいます。神は目に見えない霊界の隅々に至るまで浄化し、天国を広げ、地獄をお救いになられるのです。

現界はすべて霊界の移写、縮図です。霊界で起こったことは現界に写ってくることから、現界のことを「ウツシ世」ともいいます。現界がよくなれば霊界もよくなるという相関関係があります。

神はこの世に天国を建設されるにあたって、どうしても人間の内分を〝愛善〟〝信真〟にしようと願われています。なぜならば、人こそがこの世を天国化させる神の代行者だからです。神は人の内分を仲介することなしに、この世に神の愛善と信真を流入することができないのです。

人生の 真目的は 地の上に
無窮の天国 建つるにありけり
（出口王仁三郎聖師）

人の想念はどんなものにも通じ、どんなものの中にでも入っていきます。世の中を良くしようと思えば、まずは一人ひとりの想念を清らかにしなければなりません。

現界では人の心の立替え立直しによって浄化され、天国が築き上げられると教えられています。心の立替え立直しを「身魂みがき」ともいいます。具体的には〝素直に自己を省みる〟ことが大切とされます。そして、口（言）と心と行いが一致する生活を続け、報恩感謝の心を育むのが、神心に近づく一番の近道と教えられています。

霊界を知るということは目に見えない絶対主のご存在を悟り、この世で「生かされている」ことに気づくこととも言えるのではないでしょうか。霊界を知ってこそ、より一生懸命に生きることにつながるのだと思います。

掲載文は、平成28年8月16日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

東光苑葬祭研修会

東光苑葬祭研修会は、11月19日午前9時から、東京宣教センターで開催され、25人が参加した。

開講式の後、猪子恒東京宣教センター次長が「葬儀執行の流れ」と題し、喪家の心得や葬儀、お墓などについて講話。また午後からは高野春樹祭務課長が「斎場調度品と神饌物について」と題し、各調度品の意味や葬祭での神饌物の盛り付け方などを説明。休憩をはさみ両講師により「葬儀の司会進行の仕方」として、実際に葬祭を想定しながら実習した。「質疑応答」では、日供米（料）の意義や、大本信徒共同墳への埋葬についてなどの質問があり、研修を深めた。

実際の葬祭調度品を前に、配置位置の説明や流旗、五色真栄旗などの色の持つ意味などを研修

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は12月11日、午前10時30分から斎主・鈴木林太郎愛善宣教課主事のもと執行され、290人が参拝した。

祭員は関東教区各主会および、関東在住の青年部員、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は、東京主会の山下直輝青年部員、添釜は神奈川主会が担当した。

祭典後、浅田秋彦本部長があいさつに立ち、「本年は教主さまが五代教主としてお立ちになられてより15年の節目の年であり、神島開き100周年の現地祭典執行、また『いづのめしんゆ』刊行、聖師さま関東ご巡教並びに走水神社参拝100周年記念祭典、東京本部におけるギャラリーおほもと（東光苑）の開設など、神さまのお仕組が如実に進んでいることを感じさせていただいた」と一年を振り返り、「神教を広く伝え、救世の神業にお使えします」をモットーとする平成29年度教団方針の骨子を説明、新たなご神業の展開に期待を寄せた。

次いで、午後から開催される関東教区青松会主催の「元気が出る研修会」講師・橋本伸作大本本部青松会長があいさつ。続いて飯田俊明大本総代が、10月16日に執行された走水神社記念祭典について報告し、参拝者に謝辞を述べた。

最後に、本年9月から都内大型書店にて展開した『いづのめしんゆ』を中心とする書籍宣教活動の経過を愛善宣教課より報告。直会後には、直心会埼玉連合会と関東教区青年部によるバザー、また天声社の出張販売も行われた。

青年部員が中心となっての祭員奉仕。清々しくお使えさせていただいた

大本東京本部ホームページ

祭典・行事のご案内をはじめ、東京宣教センター所蔵の耀盌や、歴代教主・教主補さまのお作品が閲覧できます。また、本誌「阿づまの光」もWebページでご覧いただけます！

左下のQRコード・URLからアクセスしてみてください。

大本公開講座

第166回「大本公開講座」は、12月21日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、出口篁国内愛善宣教課主事が「人生にとって大切なもの」～人は何のために生きるのか～と題して講話した。参加者は26人（内、一般6人）。

講師は、『どんな場合でも「ありがたい」と思う心、これは神に近づく第一歩である』（出口日出麿尊師）とのお示しを引用しながら、「日頃から周囲に対して〝ありがとう〟という感謝の言霊を発することが大切」として、「常に心の中に春のような穏やかさをいだき、好意を持って人に接することが、神さまのみ心に添う第一歩」と語った。

参加者からは「日常生活の中で、〝ありがたい〟と思えることの大切さを感じました」（女性・一般）、「明るく楽しい雰囲気に心が洗われました」（女性・信徒）等の声が寄せられた。

東光苑祭典・行事予定

1月

1日（祝・日）午前7時執行
新年祭

1日～3日（日～火）各日午前9時30分から
年賀

7日（土）午前10時30分～午後3時
東光苑七草粥

8日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・成人式式典

18日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　出口なおの預言
～世界の大峠と立替え立直し～
講師　猪子　恒（東京宣教センター次長）

19日（木）午前10時30分執行
聖師毎年祭（69年）

2月

3日（金）午後6時30分執行
開教125年　節分大祭遥拝祭
二代教主・四代教主聖誕祭

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例大祭

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　出口王仁三郎が示した世界
～霊界物語と九州筑紫島～
講師　椎野恭三（祭務課主幹）

25日（土）、26日（日）
教本1級～3級認定講習会

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com